

国語教育における辞典指導観の変遷

深谷 圭助* 吉川 龍生** 原田 信之***

The Transition of Dictionary Instruction Perspectives in Japanese Language Education

FUKAYA Keisuke YOSHIKAWA Tatsuo HARADA Nobuyuki

要 約

本研究の目的は、国語教育における辞典指導が明治末期から本格的なデジタル化を迎える令和期までにどのように位置付けられてきたのかを明らかにするために、これまでの小学校学習指導要領における辞典指導の位置づけと、辞典指導の実態とその指導観、そして、辞典指導の課題をどのように捉えてきたのかを整理することである。

辞典指導は、これまで「分からない言葉」を「速く、正確に目当ての言葉を調べる」ことを目的とした指導をしていた。そのため、紙の辞書の語の並び順の規則を教えることに終始していた。

ところが、辞典指導観について、倉沢栄吉の「辞書引きは技術ではない」「辞書によって見方考え方を勉強するのである」等、学習指導要領で示されたものとは異なる指導観が示されていたこともあった。筆者らが、1994年以来、取り組んできた、辞書引き学習“Lexplore”はこうした倉沢の指導観に極めて近い語彙学習方略モデルであり、いわばアナログからデジタルへ移行していく端境期に定着していった語彙学習方略モデルとも言える。本稿では、「デジタル参照」時代における「辞典指導」のあり方を再定義し、語彙指導の中核として位置づけることを提案する。

キーワード：国語教育、国語辞典、辞典指導、語彙指導、学習指導要領、辞書引き学習

1. 本研究の目的

本研究の目的は、国語教育における辞典指導が明治末期から本格的なデジタル化を迎える令和期までにどのように位置付けられてきたのかを明らかにするために、これまでの小学校学習指導要領における辞典指導の位置づけと、辞典指導の実態とその指導観、そして、辞典指導の課題をどのように捉えてきたのかを整理することである。筆者らが、長年実践活動を行ってきた「辞書引き学習」は、いわばアナログからデジタルへ移行していく端境期に定着して

いった語彙学習方略モデルとも言えるわけだが、「デジタル参照」時代に「辞典指導」を検討していく上での資料の一つとしたい。

2. 「国語」の誕生と辞書

初等教育課程の教科目として「国語」が誕生したのは、1900年のことである。その直後の1904年に初めて「国語辞典」という語を辞書名に冠した辞典である林幸行『国語辞典』（修学堂）が刊行され、これに続いて1909年には『新国語辞典』（内藤弘蔵、宝文館）が、1915年には『ローマ字びき国語辞典』（上田万年、富山房）と『大日本国語辞典』（上田万年、松井簡治、富山房）が刊行された。このようにして辞書名としての「国語辞典」が定着した。これ

* 中部大学現代教育学部現代教育学科

** 慶應義塾大学経済学部・外国語教育研究センター

*** 中部大学人間力創成教育院

らの刊行前は、「日本辞典」や「日本辞書」という辞典名が用いられていた。児童用の近代的な国語辞典の登場は、昭和以後のことである。

近代国語教育界に大きな足跡を残した西尾実は、近代日本における国語教育期を大きく三つに分け、第1期を「語学教育期（明治初年から明治末年）」、第2期を「文学教育期（大正初年～昭和10年頃）」、第3期を「言語教育期（昭和10年以後）」と区分している¹⁾。ここでは、西尾の国語教育時期区分に従い、近代日本における辞典指導の指導観を振り返る。

(1) 第1期 語学教育期（明治初年～明治末年）

最初期の辞典指導の論考は、明治後期、1908（明治41）年2月、東京高等師範附属小学校相島亀三郎が「児童に辞書を使いしむる法につきて」（『教育研究』第59号、東京高等師範学校附属小学校）においてである。この論稿で相島は、「教科書が簡単になってしまったので、字典を使う必要がなくなってしまった」、「今の児童はよく漢字を覚えているか」というと事実は決して然らず。現に中学校や女学校の教師の小言は多くは小学から入った生徒の漢字の力、不十分であるということである」と、当時の状況を憂いていた。相島の辞典指導は、1900年代に国定教科書制度が整備され、小学校における配当漢字表が初めて示された時代のものであるが、彼は、漢字を節減し、分かりやすさを追究した教科書は「養分」のみを与えるようなものだと批判した。

当時は、小学生を対象とした「学習辞典」はまだ刊行されていないが、1900年代に辞典を授業で活用していた事実は、相島の論稿から確認することができる。

(2) 第2期 文学教育期（大正初年～1935（昭和10）年頃）

戦前に初等教育での国語辞典指導について言及した文献は多くはないが、木下竹次の『学習原論』と『学習各論』では、国語辞典指導に対する木下の考えを現在に伝えている。

「文を読んで、最初は難語語句に多く心を留めずに漠然ながらもその内容を掴み、理解の出来ただけ纏める。大抵のものは難語句に心を取られて、質問したり、字引を引くようなことを為て、内容に触れることが困難である。

これは理解し得るところから学習するのではなく、理解のできないところから出発するのだから、独自学習には極めて不向きである²⁾。」

木下は、「難語句に心をとられて、質問したり、字引を引くようなこと」に拘ってしまうと、肝心な内容を掴むことが困難になること、即ち、「理解し得るところから学習するのではなく、理解のできないところから出発する」ことは、主体に導かれて進められる「独自学習」を妨げると主張していた。

さらに木下は、以下のことにも注意を喚起していた。

「良く考えないで字引を引くことと、語彙語句に大体の見当をつけて意義を考ふることなしに字引を引くことは大なる弊害の存するところである。また、字引を引きすぎること、その結果をノートに書き過ぎることは弊害を伴ふから考慮を払ふ余地が十分にある。過度に字引を引けば自らの不用の穿さくに陥り、又時間を徒費する。ただし自分の考えを確かめるために字引を引くならばたいていは害はない。多く引くほど宜しい。大体の見当をつけて字引を引かぬと、字引に訳が沢山あるから、適訳を得ることが困難である。字引を引く稽古をすれば、その能力は大に発展する。此の力を利用して幾度でも字引を引く覚悟で、熟語を摘出して読みや注解を付けぬ様にするのが望ましいが、優秀な学習者でなくては困難であらう³⁾。」

木下は、『学習原論』（明治図書、1972、240ページ）において、「およそ学習には難より着手するのと易より着手するのとの二場合がある。学習者がその一方に執着するのはよろしくない。」と述べており、独自学習において、難から易、易から難への二つの学習のパターンがあるとしているが、『学習各論（下）』（明治図書、1920年、130-132ページ）においては、わからない言葉がある段階、即ち「難から易」では、独自学習は始められず、「わからない言葉を調べることは時間の徒労である」と述べている。木下は「まず自分のできるところから着手して、漸次生活を拡充していく」という考え方から、学習者が「辞（字）書」に依存しすぎることに對して慎重な立場をとっていた。

こうした態度は、辞（字）書はなるべく引かずに、わかるところ、できるところから着手していくという考え方に連なっていく。「辞書を引きすぎることは好ましくない」というのが木下の主張である。文

脈上で言葉を理解しなければ意味がないという考え方は、文学教育における言葉理解の特徴である。

第2期の国語教育は、「いかに噛み砕いて児童に教えるか」が教授上の課題であり、子どもの主体的な学びを支える国語辞典の活用については全く着目されていなかった。辞書を必要とする場面に子どもたちが遭遇することも少なく、教師に尋ねれば事足りていたということであろう。子どもに最適化された辞書も刊行されていなかったことも要因の一つである。

(3) 言語教育期①(1935(昭和10)年～1945(昭和20)年)

1935(昭和10)年以降、国語教育界に言語機能的な国語教育観が台頭してくる。これには、植民地における日本語教育への関心が高まったことも起因している。学問的には垣内松三を中心とする雑誌『コトバ』において、各国の言語哲学や言語教育が紹介されたことによる。この雑誌グループには、戦後、学習指導要領国語科編成の中心人物として活躍した奥水実らがおり、奥水はドイツの言語哲学やアメリカの言語教育を積極的に紹介した。奥水は、このアメリカの影響を受け始めた時期から、「言葉の意味を調べる」行動に対して、積極的な意味を見出すようになった。

奥水は『言語教育概論』(1940年)の中で、アメリカの「コース・オブ・スタディ」を取り上げながら、日本の国民学校における言語教育プランを示し、そこで国民学校第4学年で辞典指導を取り入れることを提案していた。この奥水のプランは、戦後、彼が中心となった、1947年版学習指導要領試案(国語編)作成の基礎になっており、小学校第4学年から辞典指導を始めることの原型は、ここに準備されていたのである。奥水の『言語教育概論』では、アメリカのライバーが『小学校における言語教育』(1916年)で示した言語教育の学年的段階を参照し、第4学年に「語彙(読物、辞書)、文語と口語、地方的差別」(207頁)を言語教育の重点におくプランを提唱していた。ここに、戦後、小学校学習指導要領における「辞典指導」の起源を認めることができる。

その前史としては、1936年に松宮弥平が『日本語教授法』(日語文化学校)を、同年に奥水実が『国

語教育理論：国語教育と言語哲学との関関』(文学社)を、1939年に同じく奥水実が『言葉は伸びる：国語教育革新のために』(厚生閣)を、そして、1943年に山口喜一郎が『日本語教授法原論』(新紀元社)を著すなど、日本語教育を「言語」教育として如何に教えていくかに関心が寄せられた著作の出版が相次ぎ、辞典活用はこれらの著書においても取り上げられている。

(4) 言語教育期②(戦後新教育運動期／1947(昭和22)年～1958(昭和33)年)

第二次世界大戦終結後、奥水は、戦前からアメリカのカリキュラムに精通していたことから、アメリカのコース・オブ・スタディを元に、1947年版学習指導要領試案の作成にあたり、日本の国語教育の指針づくりの役割を担うことになった。彼は、辞典指導を小学校第4・5・6学年で展開することを学習指導要領試案に示したが、国語における辞典指導の意義については彼自身の著作で補説している。

「『辞書の使用について』も4ページにわたって、わかりやすく書いてあります。この問題は、アメリカとわが国とでは、非常に事情がちがいます。わが国では、国語辞典と漢和辞典があって、漢字のことばは漢和字典、かなのことばは国語字典でなければ引けません。またその定義の方法や用例の提示など、辞典的方法も確立していません。だから、アメリカの辞典のように3年生や4年生では辞書を使いこなせません。辞書そのものに根本的欠陥があるのです。それに辞書の使用ということが換言的解釈だけですますという傾きをもつことは警戒しなければなりません。しかし『学習指導要領』に書いてあることはみな適切なことです⁴⁾。」

奥水は、米語とは異なる日本語の言語仕様のため2種類の辞典を使いこなす必要に迫られること、その指導には第4学年で重点的に取り扱うだけでは限界があることに加え、2種類の辞典の、辞典的提示方法の不完全さという根本的欠陥があることを指摘していた。辞典指導は、奥水の貢献により、後に教育課程の基準になる学習指導要領に位置づけられたものの、その指導方法は未開拓に近い状態にあったこと、そして2種類の、奥水の目には不完全に映った辞典そのものの改良を伴うという課題が介在していたことを伺い知ることができる。

3. 小学校学習指導要領における辞典指導の変遷

辞典指導は、1947年版小学校学習指導要領(試案)から導入され、最新の2017年版小学校学習指導要領にいたるまで、途切れることなく位置づけられてきた(表1参照)。1989年版小学校学習指導要領まで、小学校第4学年(1998年版以降は第3学年)から辞書の使い方を指導し、第5学年で辞書を使い、第6学年では辞書を使うことが習慣化されるように、指導は系統立てられている。

1951年版から1958年版小学校学習指導要領までは、小学校第5学年を中心に辞典指導をすることが掲げられている。これは、1947年版試案で辞典指導が示されたものの、後述のように小学生が使用する適当な辞書が存在しなかったことにより、第5学年を中心に行うと改めたのではないかと考えられる。第4学年の目標に「わからない文字や語句を文脈にそって考えること」とし、第5学年の目標として「わからない文字や語句の読み方や意味を自分で調べることができるようにする」と「辞書」という言葉がなくなっている。そして、「上に示す指導事項のほか国語辞典などが使えることなどについて指導することも望ましい」との記述があり、更に、『『望ましい』として示された事項や活動は、事情が許せば指導するように努力するべきものを意味している」とある。教育課程の基準上の「望ましい」という表記は、拘束力を伴わない訓示的なものである。これは当時、小学校で児童に対して辞書を用意することが困難であったことに起因する変更であろう。

なお、当時の辞典の刊行状況については、1951年に小学生を対象とした最初の国語辞典である、小林国雄『現代国語辞典』(信学社)が刊行され、1954年には118版を数えた。これを契機として、1954年に金田一京助『標準小学国語辞典』(学研)が刊行され、200万部の売り上げを記録している。その後、1955年に『小学国語辞典』(三省堂)が刊行され、さらに、1958年には、『学習国語新辞典』(小学館)が刊行され、1951年から1958年の間に小学生向け国語辞典が学校現場に行き渡るようになり、小学校で実地的な辞典指導が可能となったのである。

辞典指導は、1968年版小学校学習指導要領以後、

第4学年で「わからない文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解すること」、第5学年で「わからない文字や語句を辞書で調べること」、「文章を書くときに辞書を利用しようとする事」、第6学年で「わからない文字や語句を辞書で調べながら、文章を読む習慣をつけること」、「文章を書くときに辞書を利用すること」として、各学年に段階的な指導目標が示されたが、これらは段階的な指導の手順は示されてはいても、形式的な系統の域を超えていないものである。

1977年版から1989年版小学校学習指導要領まで、第4学年で「表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解すること」、第5学年で「表現したり理解したりするために必要な語句について、辞書を利用して調べること」、第6学年で「表現したり理解したりするために必要な語句について、辞書を利用する習慣をつけること」としており、相変わらず形式的な段階的指導の系統性が示されていた。4年生で調べる方法を理解し、5年生で調べ、6年生で習慣をつけるといった指導の系統は効果的ではない。辞書で調べる方法を理解させてから、1年後に辞書で調べさせ、更に1年後に辞書で調べる習慣をつけるという段階化はナンセンスであり、言語論的習熟の根拠を欠いている。この間延びした段階指導が、辞典指導の形骸化を助長したと考えられる。

1998年版小学校学習指導要領では、第3学年から第6学年で辞典指導が行われるようになった。第3・4学年では、「表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解すること」、第5・6学年では「表現したり理解したりするために必要な語句について、辞書を利用して調べる習慣をつけること」に教育課程の基準が改正された。これは、学習指導要領において、弾力的な指導が可能になるように、2学年ごとに指導目標と指導内容が統合されたことに拠る。ここでも、中学年で「調べる方法を理解し」、高学年で「調べる習慣をつける」という形式段階的な学年別指導の系統性が保持されている。

2008年版小学校学習指導要領から、辞典指導は第3・4学年で実施されることになり、具体的には、第3学年で国語辞典、第4学年で漢字辞典の指導が

国語教育における辞典指導観の変遷

表1 学習指導要領における「辞典指導に関わる目標」の変遷

	1947 (昭和22) 年 学習指導要領試案	1952 (昭和27) 年 学習指導要領試案	1958 (昭和33) 年 改訂学習指導要領	1968 (昭和43) 年 改訂学習指導要領	1977 (昭和52) 年 改訂学習指導要領	1989 (平成元) 年 改訂学習指導要領	1998 (平成10) 年 改訂学習指導要領	2008 (平成20) 年 改訂学習指導要領	2017 (平成29) 年 改訂学習指導要領
1年			文章を読むために必要な文字や語句を身につけるようにする	わからない文字や語句に注意すること	読み方や意味の不明は文字や語句に注意すること	読み方や意味の不明は文字や語句に注意すること			【情報と情報との関係】 ア 共通、相違、事柄の順序など情報と情報との関係について理解すること
2年			読むために必要な文字や語句を確実に身につけるようにする	わからない文字や語句を見つけて出すこと	表現したり理解したりするために必要な文字や語句を増すこと				
3年			読むために必要な文字や語句を増すようにする	わからない文字や語句を見つけて出すこと	表現したり理解したりするために必要が文字や語句を増すこと		表現したり理解するために必要な文字や語句について辞書を利用して調べる方法と	【語句に関する事項】 (オ) 表現したり理解したりするために必要な語句を増し、また、語句には性質や役割があることを理解すること。 (カ) 表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解し、調べる習慣を付けること	【情報と情報との関係】 ア 考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報と情報との関係について理解すること 【情報の整理】 イ 比較や分類の仕方、必要な語句などの書き留め方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方理解し使うこと
4年	4年生から6年生の国語科学習指導の「読みかた」の中に「辞書や参考書の使用法を身につけさせる」という目標を設定している。4・5・6学年後期の学習指導で参考書や辞書の使い方に慣れていくことを掲げている。 ・辞書の利用について【留意事項】 ①辞書の必要なわけ ②現在の辞書について ③児童・生徒の学習辞書について ④辞書利用についての一般的注意 ⑤辞書に興味を持たせるにはどうするか		読むために必要な語句を一層増すようにするわからない文字や語句を文脈にそって考えること	わからない文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を利用すること	表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解すること	表現したり理解したりするために必要な文字や語句について、辞書を利用して調べる方法を理解すること			
5年		辞書の引き方がわかる ※5年生を中心に指導 辞書を引いて新出語の意味をとらえることができる ※5年生から指導	わからない文字や語句の読み方や意味を自分で調べることができるようにする ※上に示す指導事項の他「国語辞典などが使えること」などについても指導することも望ましい ※「望ましい」として示された事項や活動は事情が許せば指導するように努力すべきものを意味している (P.47)	わからない文字や語句を辞書で調べると文字を書くときに辞書を利用しようとする	表現したり理解したりするために必要な語句について、辞書を利用して調べる	表現したり理解したりするために必要な文字や語句について辞書を利用して調べる	表現したり理解するために必要な文字や語句について辞書を利用して調べる習慣をつける	【語句に関する事項】 (エ) 語句の構成、変化などについて理解を深め、また、語句の由来などに関心を持つこと (オ) 文章の中での語と語の関係を理解すること (カ) 語幹、言葉の遣い方に対する感覚などについて関心をもつこと	【情報と情報との関係】 ア 原因と結果など情報と情報との関係について理解すること 【情報の整理】 イ 情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うこと
6年				わからない文字や語句を辞書で調べながら文章を読む習慣をつけること文章を書くときに辞書を利用すること	表現したり理解したりするために必要な語句について辞書を利用して調べる習慣をつける	表現したり理解したりするために必要な文字や語句について辞書を利用して調べる習慣をつける			

行われることになった。1998年版までは、「辞書を利用して調べる方法を理解すること」と「辞書を利用して調べる習慣を付けること」が別の学年に設定されていたが、2008年版から、「辞書を使って調べる方法を理解し、調べる習慣を付けること」と切り離されていた目標が一体化され、ここに辞典の指導系統性に関する考え方に大きな変化が見られる。

2008年版まで辞典指導は、「語句に関する事項」に位置づけられていたが、2017年版小学校学習指導要領では、「情報の整理」に位置づけられた。このことは、辞典指導の位置づけが、言語教育から情報教育の文脈上にその位置づけが変更されたことを意味する。

4. 辞典指導に関する指導観の変遷

前章において、小学校学習指導要領における辞典指導の変遷を取り上げた。ここでは、興水、吉岡、倉沢、大熊の言説に基づき、辞典指導の背景にある指導観の変遷に着目して、どのように指導の系統化が構築されたのかを論じることとする。

興水は、『國語のコースオブスタディ』（1948年）において、以下のように述べていた。

「語彙の学習指導の根本は、その語彙を基本的文脈で提出する。そうした経験を与えるということである。先年、私は6年生の授業であったが、『辞書の使用』を教えようとする。その導入のところで、ちょうど、教師が『みんなは本を読んでいてもわからない言葉ができたらどうする?』という質問をしている教室にはいったことがある。その答えは『辞書で調べる』となり、『それでは辞書を引いたことのある人?』ということになる予定らしかった。ところが、中の相当成績のいいらしい子どもが、『わからない時でも、そのところを良く読んで考えるとたいいていわかって来るから、そのところをよく読む』と答えた。先生はちょっと面食らったという形であった。（中略）アメリカでは辞書は小学校の2・3年から引く。そして引くことによってつづり字をおぼえる。日本でも辞書は4・5年生から使ったら良いと思うが、日本の辞書、国語辞典でなく漢和字典は引きにくい。非常な努力をして報いられるところが少ないことがある。また、国語辞典の方の定義

が難しく、学習者に適切な用例に乏しい。教室における辞典使用は、辞書を引けば、成功するという見通しのつくものに限り、他は直接説明をくだして、時間を効果的に使用し、辞書への信頼感を強めた方がよい⁵⁾。」

「われわれはまた、カナの特殊性を確実に把握しなければならない。カナはABCではない。シラブル（音節）の表記をするのである。アメリカでは語彙から入ってABCから入らない。ABCを習っても語にはならないし、そのものとしては、音便の練習にもならない。だから外国語では単語から入る。そして、それを文脈の中に位置付けて文章で出すのである。これが、センテンスメソッドである。センテンスメソッドでも実は語彙の提出、統制が実にやかましいのである。そして、それをそのままもっているのが日本の教科書である。しかし、これはカナの特殊性、日本語の表記の特殊性を無視したやり方である。カナは、それによってどんな言葉でも綴り合わせることができる大きな機能を持っている。（中略）日本では1年生の2学期から作文教育がある。外国ではその間、口頭作文はやっても文章は書かせない。ところが、この作文の能力が4年5年になると伸びなくなるのはなぜか。外国の方がどんどん伸びていくのはなぜか。それは別として、カナについては早くからそれを提出し、学習させてしまうこと。さらに漢字についてもその本当の特殊性を知って正しい学習指導法を研究することが大切である⁶⁾。」

興水は、アメリカの言語教育を参考にしながらも、日本語のかな文字の特殊性を踏まえた上での指導の系統が望まれるとしている。1958（昭和33）年の学習指導要領改訂で、「国語辞典などが使えること」という指導事項は、5年生の「望ましい」事項に初めて顔を出す。なぜ、「望ましい」指導事項に国語辞典の指導が入れられてしまったのか。この間の事情について指導要領改訂に関わった者の証言によると、次のような諸点が考慮されている⁷⁾。

(1) 「望ましい」指導事項に入れられた理由

- ア 全国的に見て学校図書館に辞典を備えているとは限らないので、ぜひ備えるようにすることは問題である。
- イ 児童一人ひとりに辞典を買わせることは、父兄の負担という点から問題がある。

(2) また、五年生で辞書の指導を始める理由として

- ア わが国の文字のむずかしいという現段階から考えて、辞書を使うことを下の学年で出すのは無理だと思われる。
- イ 今までの辞典は下学年から使えるように作られていない。
- ウ 辞書の仕組みや引き方を理解させるためにはその下準備としてやっておかねばならないことがある。四年以下はそういう指導にあてられる。

このような辞書引き指導に対し、当時の状況を吉岡は、以下のように述べ、後世に伝えている。

「辞書を常用するくふうもなく、受身の学習に傾いたり、簡便な自習書を頼ったりしている者も少なくないようである。また、辞書の種類は年々増え、しかもその売れ行きは悪くないようなのに、辞典を使う能力はあまり伸びていないようである。その原因はどこにあるのだろうか。①辞典を学校図書館に備えたり、子どもたちめいめいに買うことを勧めたりして、ある時期に辞書の使い方を指導することがあっても、その後の継続的な指導がゆるがせにされやすいのではなかろうか。②子どもたちが、辞書の重宝なことを知り、辞書を使うことに興味を持ち、親しみを増すような指導に手落ちがあるのではなかろうか。③児童生徒のそれぞれの発達段階に適切な辞書が与えられていないため、子どもたちを辞書から遠ざけるようなことはないだろうか。このように考えてみると、子どもたちが辞書に親しまないとか、それを使う能力が低いとかいう原因は、私ども教師の側にも多分にあるように思われる⁸⁾。」

1960（昭和35）年版小学校国語指導書は、1958年版学習指導要領用に作られたものであるが、辞典指導について中学校側から次のような要望が出されていた。「辞書の利用法が身に付いていない。語句の意味を文脈の中で捉えることができず、辞書のひき写しをする。（p. 88）」ここでいう辞書の利用法とは、従来の国語的な辞書の利用法である、文脈の中で語の意味を捉えてから辞書を引くことを意味している。

1968年版においても、1977年版小学校学習指導要領においても、辞典指導の方針は大きく変わらなかった。それに対して、検索の速さや技能に囚われることは、枝葉末節のことであることを、戦後日本の国語教育をリードした倉沢栄吉は鋭く指摘していた。

「辞書は、わからない言葉のわけを見つけるためにある、書けない漢字の正しい形を検索するためであるとされる。つまり字引には見出し語や見出し字を頼りにその語句や文字の意味を探り探り当てたうえで、その意味群の中から一つを文脈に当てはめてみて、納得するといった具合である。このような辞書の見方扱い方は、明治以来百年も続いてきた。例の「国語読本字引き」のたぐいであって、近代の国語教育論には耐えるべくもない習慣だったのである。語彙を豊かにさせるためには、こういう要素主義、孤立主義、とりたて本位の辞書指導から、まず開放されなければならない。辞書の指導が語彙拡充のための唯一のまたは有力の手段であるとまでは言わない。しかし、辞書一つとってみても、日本の国語教育の欠損部分が無反省のまま放置されていることは判然としている。（中略）辞書の引き方は技術ではない。頁のめくり方とか検索の速度とかは末梢的なことであろう。より基本的なねらいはいつも辞書を身近にもっていること、わからない言葉、不明な用語をそのままにしておかないこと、曖昧な言葉、いいかげんな表現を拒否したい潔癖さを感じること、辞書に頼る時間と手間を面倒がらないこと等々である。小学校低学年用辞書にろくなものがないというので、辞書に親しむことを、高学年まで待たせるのは適切ではない。小さい頃から辞書に慣れさせることである。この種の辞書が米国には圧倒的に多い。一つには学習基本読本系が確立しているからでもある⁹⁾。」

倉沢は、わからない言葉のわけや書けない漢字の正しい形を検索するために辞書を使うことから解放されなければならないという。そして「辞書引きは技術ではないこと」、「曖昧な言葉、いいかげんな表現を拒否したい潔癖さ」を重要視し、関連したページを見る、見出し語の前後にも目をやるゆとりが欲しいという。続けて倉沢は次のように当時を振り返っている。

「辞書を引くということばはどうやら適切ではないようである。辞書に当たって確かめるとき、関連的に他の頁をも見るとか、その見出し語の前後にも目をやるとかする余裕が欲しい。辞書は一冊の本である。当面する問題に応えるためではなく、万般の事項につき広範な確かな教養を与えてくれる。だから、

ときどき辞書を開いて読みふける習慣を持つ人がいるのである。こういう人はうらやましい。辞書で学ぶのである。辞書を使って考えるのである。語彙の拡充にはこのような発想が基本になる。つまり、辞書によってものの見方考え方を勉強するのである。(中略) その為の一助として、辞書で辞書と遊ぶということがある。辞書を使って学ぶと同じに常に辞書に接し、時世の中の語感や語義語形を変形変容しつつ、展開させていくのである。こういう辞書をつかってする『漢字遊び』『語句語彙遊び』が語彙を豊かにする一つの道である¹⁰⁾。」

倉沢は、辞書が一冊の本であるとするならば、それは当面する課題に答えるためのものではなく、万般の事項に広克的確な教養を与えてくれるものでなくてはならないという。

1989年版小学校学習指導要領に対しては、大熊は、辞書を速く引くことや効率的に辞書で調べることの問題を指摘し、加えて特に辞書を読み浸ることの重要性について、「試みに今、手元にある辞書を随意に繰り開いたページを読んでみるとよい。辞書の面白さに気づくはずである。未知の言葉が無秩序に知る知的好奇心、誤って記憶していた語義に気づく羞恥心と直後の安堵感、よしこれは使えるぞという言葉を発見する喜び等々の含まれた面白さである¹¹⁾。」と論じている。

このように大熊は、「辞書の面白さに気づく」とことや「言葉を発見する喜び」について、教材文の文脈から離れることを忌む文学教材読解中心の国語指導とは異なる言語教育の立脚点に立って論じていた。そのことは、「辞書利用指導の際には、このような辞書との付き合い方を体験的に紹介し、児童・生徒と共に辞書に読み浸る時間を持ちたいものである。昨今の児童・生徒向けの国語辞書にはカラフルで読み物としての価値が高いものが多い。楽しい学習活動になるだろう¹²⁾。」との言説にも表れている。大熊は、「辞書に読み浸る時間を持ちたい」と述べているが、これは、辞書を速く引くことに価値を見出す考え方と正反対の価値観である。この価値観こそ言語教育における語彙指導に適合する考え方であろう。大熊としては、「辞書は何点かを比べ読みすることによってその機能をより確かに捉えることができる。可能な限り比べ読みをしてみたい。そして、

その習慣を身につけたい¹³⁾。」というところに真意があり、辞書を比べ読みすることによって、言葉の多面性に気付かせることを重要視していたのである。この大熊の考え方は、文脈からの理解から一歩もはみ出すことを許さない辞典使用とは全く異なるものである。

5. 考察

本稿では、日本の小学校国語教育において辞典指導観がどのように変遷していったかを、当時の主要な論者の文献から考察した。第二次世界大戦後の国語辞典の指導が主体性を育て自ら学ぶ力を育てる指導につながる可能性を秘めているにもかかわらず、形骸化してきた原因として次の3点を指摘することができる。

第1に、国語科の授業において、国語辞典の引き方指導は行われていても、その活用の仕方についての指導は行われてこなかったことである。第2に、国語辞典指導の系統が形骸化しているため、型通りの指導に終始していることである。第3には、国語辞典指導が、教科書教材を読解するための文脈でしか行われておらず、語彙指導との関連で辞書が使われることが少ないこと、そして方法指導（辞典活用）と内容指導（語彙指導）との間の一体的活用が十分になされていないことの問題である。教科書教材の文脈とは異なる発展的な語彙学習が行われていなかったのである。

文章の中で語彙を理解しなければ意味がないという「文学教育期」以来の考え方が強固な指導観において、語彙学習を教科書教材文から切り離せないことが、語彙を辞書で調べることの軽視に繋がっている。「調べすぎるのはよくない」「調べる前にまず予想するべし」という考え方が根強い。この考え方は、辞書を引く時間が無駄であるから、情報端末で調べた方が、手間がかからず、短時間で調べることができ、その方が楽だと思えることにつながる。語彙指導の立場からすれば、語彙を広げたり深めたりするには、辞書を読むことの方が重要である。しかしながら、小学校の45分間の授業時間で、教材文の読解を行うことが前提になっている以上、児童が時間をかけて辞書を読んだり引いたりする時間は無駄な

時間だという意識になるのも無理はない。

日本では、かな文字さえ読み書きできれば、文を綴ることができる。他方、英語ではアルファベットが読み書きできても、単語（語彙）を覚えなければ、文は綴れない。そのため、日本の国語教育では、語彙指導が不十分となり、読解指導に勤しむ一方で、あまり積極的に語彙の拡張や深化をめざす辞書指導が行われなかった。国語辞典に収録されている言葉は、その時々、社会において通用している言葉であり、語釈や用例も連動しているのであるが、国語辞典指導ではこの社会的文脈と切り離された指導がなされてきた。文学教育期、木下竹次は、辞書の引きすぎには問題があり、文脈の中で考えて予想すべきであると訴えていたが、こうした意識が辞典指導を軽視する風潮を生み出していたと考えられる。戦後もなお、辞書を引くことよりも、前後の文脈からわからない言葉の意味を類推することが大切という風潮は続き、学習指導要領において辞典の引き方を理解させ、辞書を利用することを習慣化することを目標にあげながら、実際の国語授業では辞典指導がなおざりになったことは容易に想像できる。文脈の中で考えることと辞書を引くことは、言葉を検討する上において両輪なのである。

興水実が述べたように、当時の国語辞典は、言葉の語源研究の成果としての辞典であり、リアルタイムの言葉を網羅したものではなかった一面もある。国語辞典は、生活の中の言葉を全て網羅する必要はなく、俗語を入れることは辞典の威厳を傷つけると考えられていた。そのような辞典であれば、子どもたちが言葉を調べても出てこないこともあり、日常で使われている言葉を調べることは、労多くして益少なく、辞書に対する不信感を高めるだけだったといえる。当時、子どもたちに使われていたのは、『国語読本字引き』（現代の「教科書ガイド」）であり、これは教科書に出てくる言葉の意味が掲載されている小冊子だった。これは、戦後しばらく、学習雑誌の付録として、市中に出まわっていたものである¹⁴⁾。当然ながら、探究的な調べに応じるものではなかった。興水は、国語辞典を活用することで自らの求知心を満足することができるなどの意義は認めつつ、辞典は子どもたちが活用できるつくり方になっているかについては十分ではないと認識してい

た。

以上のように、文脈の中で語彙の意味を考えることに拘泥する伝統的な国語教育の考え方に加え、当時の国語辞典の編集方針から小学生が学習用に辞典を活用できる状況ではなかった。現在では、国語辞典は進化し、現代に息づく言葉や百科語彙が数多く辞書に収録され、子どもの使う辞書にも子どもの身の回りの語句が網羅的に入れられるようになった。こうした辞典環境の変化は、辞書指導の可能性を広げる動向でもある。これまでの辞典指導の風潮が続く限り、情報端末で教科書教材文中の不審語を速やかに調べることはできても、語彙力の拡張・深化に資することは難しい。従来の国語教育では、辞書は、読み方や書き方のためにしか使用されてこなかった。倉沢や大熊の言うように、読むために「引く」、書くために「引く」のではなく、辞書そのものを「読む」ことの面白さに気づかせるところに指導の新たな展望を開くことができよう。

1990年代初め、これまでの辞典指導のあり方と画期を為す指導法が提案されるようになった。深谷圭助は、付箋を付けながら辞書を読み進める、辞書引き学習法¹⁵⁾を開発し、『小学1年に国語辞典を使えるようにする30の方法』（明治図書、1997年）、『7歳から辞書を引いて頭をきたえる』（すばる舎、2013年）、そして、『1年生になったら紙の辞書を与えなさい』（大和書房、2020年）を刊行している。これらでは、辞書を引くことから辞書を読むこと、そして、不審語ではなく既知語に注目させて、既知語の認識を省察させることの大切さを主張してきている。

辞書を速く引くことに価値を置くのであれば、情報端末によるデジタル参照の方が速く調べられる。実際、小学生に紙の国語辞典と電子辞書でどちらが速く引けるかを比較した研究が存在するが、この研究は、「速く引けるかどうかに意義がある」という前提があると推察される¹⁶⁾。しかし、子どもの語彙を広げ、語彙を深める観点からすれば、速く辞書を引くことが、効率的な子どもの語彙拡張、語彙深化に結び付くとは限らない。これまでの、辞書引き指導が、教科書教材読解の文脈に引き付けられて行われてきた問題が、情報端末による検索にそのまま引き継がれることは問題解決にならない。辞書を速く

引くことができることに価値を置く指導のあり方が
情報端末による検索に引き継がれるとするならば、
これまで残されてきた子どもの語彙指導の問題は先
送りされるのではないだろうか。

注

- 1) 西尾実『国語教育問題史』(国語教育講座)、刀江書院、1951年、71ページ。
- 2) 木下竹次『学習各論(下)』玉川大学出版、(教育の名著〈9〉)1972年、130ページ。
- 3) 同上、131ページ。
- 4) 奥水実『国語のコースオブスタディ』非凡閣、1948年、58-59ページ。
- 5) 奥水実『人間形成の国語教育』有朋堂1953年、76-79ページ。
- 6) 同上、92ページ。
- 7) 吉岡順二「小学生向きの辞書の比較研究及びその学習指導①」『国語教育』11月号、三省堂、1959年、17ページ。
- 8) 同上、13ページ。
- 9) 倉沢栄吉「語彙拡張のための指導と辞書」『国語教育』10月号、明治図書、1979年、5ページ。
- 10) 同上、5ページ。
- 11) 大熊徹「実践的言語環境の充実のために」『国語教育』

8月号、明治図書、1990年、5ページ。

- 12) 同上、6ページ。
- 13) 同上、7ページ。
- 14) 例えば、1937(昭和12)年に刊行された『綴方辞典』(『小学五年生九月号』第17巻6号、附録)のように学童向け雑誌の附録として学習国語辞典は出回り始めている。
- 15) 「辞書引き学習法」については『大辞泉』(小学館)『大辞林』(三省堂)の解説があるが、これらに加え、開発者の深谷圭助は、以下のように補足している。「この学習法の特色は二つある。一つは、辞書を引く際に、未知の語だけでなく、既知の語も辞書を引く対象の語として認めるということである。もう一つは、辞書を引いた際、見つけ出した語が掲載されている頁の余白に、通し番号を付し語を書き写した付箋紙を貼るということである。」深谷圭助「子どもと言葉の出会いに関する国際比較研究-イギリスと日本における『辞書引き学習』の導入事例を中心に」『現代教育学部紀要』第10号、2018年3月、48-49ページ。
- 16) 長田有紀、小林祐美、矢澤真人「小学生における辞書引き活動の調査—辞書媒体による検索行動の差異および辞書内容の分析」『国語科教育』第91号、全国大学国語教育学会、2022年、9-17ページ。

受付日 2025年3月15日

受理日 2025年5月15日

Abstract

The purpose of this study is to clarify how dictionary instruction has been positioned in Japanese language education from the late Meiji period to the Reiwa era, which marks the full-scale transition to digitalization. To achieve this, we examine the role of dictionary instruction in the successive Courses of Study for elementary schools, actual practices of dictionary instruction and the underlying instructional perspectives, as well as how challenges in this area have been perceived over time.

Traditionally, dictionary instruction has focused on enabling students to “quickly and accurately look up unknown words,” emphasizing the teaching of alphabetical or syllabic order in printed dictionaries. However, there have also been perspectives that differ from the course of studies in Japan —such as those of Eikichi Kurasawa, who asserted that “dictionary use is not merely a technical skill” and that “students should learn ways of seeing and thinking through dictionaries.”

Since 1994, we have been engaged in developing and promoting “*Lexplore*”, which aligns closely with Kurasawa’s instructional philosophy. *Lexplore* represents a vocabulary learning strategy model that gained traction during the transitional period from analog to digital reference tools.

This paper aims to serve as a reference for rethinking the role of dictionary instruction in the contemporary era of “digital reference.”

Keywords: Japanese language education, Japanese dictionaries, dictionary instruction, Course of Study, *Lexplore*